復活節第3主日　5月　1日　分かち合い

ヨハネ 21-1～

先週の福音では、復活されたイエスが弟子たちと、さらにはその場にいなかったトマスに姿を現されたことが読まれました。今日は、ヨハネが三番目の出現と書く、ガリラヤでの出現の記事が読まれました。

ガリラヤは、かつてイエスが活動の舞台に選ばれた場所、弟子の多くがイエスの呼びかけに応えて、すべてを置いて従った故郷です。イエスは生涯の最後の日々をエルサレムで過ごし、そこで十字架につけられて亡くなられ、墓に葬られました。エルサレムは、イスラエルの人なら、だれもが憧れる聖なる都です。しかも、弟子たちが復活のイエスにはじめて出会った場所です。

しかし、復活されたイエスがガリラヤで弟子たちに会われたことを、どの福音書も例外なく記しています。直接それに触れないルカにおいても、空になった墓を訪れる婦人たちに、「まだガリラヤにおられたころ、お話になったことを思い出しなさい」と復活を告げる使者が言います。ガリラヤは、ただ、懐かしい思い出の場所であるだけでなく、弟子たちが、そして、イエスを信じて生きる人々、わたしたちが日々の生活を送る、生活の場、日常性を表わす言葉です。そこは、弟子たちが漁をし、労働の成果をわかちあうだけでなく、天候や予測できない状況に悩まされ、人間同士のいさかいの絶えない場でもあります。

イエスは、まさに、そのような場所で人々に会うこと、その苦しみに直面する人々に寄り添うことを望んでおられるのです。案の定、弟子たちは舟を出しますが、「その夜は何もとれなかった」とヨハネは記します。疲労困憊、むなしさ、無力の体験、それこそが、イエスとの出会いの条件です。人間が手をつくし、万策尽きたとき、神は、手を差し伸べられるのです。「舟の右側に網を打ちなさい。そうすればとれるはずだ」。岸辺に立つ男が何気なく投げかけた言葉に、弟子たちは素直に従い、網を降ろします。それがイエスだとはだれも気がつきません。そして、大漁。「魚があまり多くて、もはや網を引き上げることができなかった」とあります。それは、人間の努力ではなく、神の無償の恵みです。思いがけず与えられる、人間の想像をはるかに超える、あふれるほどの賜物です。あのわずかのパンで5000人もの人の空腹を満たされた時のように、あまったパンを数えると12のかごがいっぱいになったように、網にかかった大きな魚は153匹にもなったとあります。

はじめに、それが「主だ」とわかったのは、あのイエスの愛しておられた弟子でした。使徒の頭ペトロは、その弟子の言葉に従って、「上着をまとって湖に飛び込んだ」とあります。日常性の中に働く復活の主の力を感じるためには、特別な恵みが必要なのでしょうか。祈りの賜物でしょうか。教会は、いつの時代も、組織の長ではなく、時代の歩みの中に神の働きを見出す霊的な師、時のしるし、聖霊の導きを察知する目をもつ人々によって導かれてきたことを忘れてはなりません。

陸に上がると、すでに朝の食事が準備されています。「イエスは来て、パンを取って弟子たちに与えられた。魚も同じようにされた」。それは、空腹を癒す朝食ではなく、弟子たちに、そして、教会に残されたイエスの遺産、世の終わりまで旅を続ける神の民を養う聖なる糧のしるしではないでしょうか。ミサの中で司祭が唱える言葉のもととなったパウロの言葉、「このパンを食べ、

杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせる」、「主の晩餐」の先駆けだったのではないでしょうか。

主の復活を記念することは、十字架を否定することではありません。十字架の死がなかったことにすることでもありません。これからも、それが無くなることを約束するものではありません。今も、そして、これからも、一人一人の人生の中で、教会の中で、人類の歩みの中で、十字架が再現されることは否定できません。同時に、それが、復活へとつながる道であることも、教会は信じています。コロナの災禍も、ウクライナの悲劇も、主の十字架と無縁ではありません。それは、主が、今も、人々と共に苦しみ、血を流しておられることを意味します。しかし、それが、主の苦しみであるならば、それが、いつの日か、復活へと導くものであることを信じ、希望することができないでしょうか。

復活節を過ごすとき、主がかつて弟子たちに姿を現されたことを思い出すだけでなく、今も、わたしたちのありのままの現実の中に、ともに生き、喜びも悲しみも共にしてくださることをより深く実感し、日々の苦しみを乗り越える力をいただくことができるよう祈りましょう。（S.T.）